

市民研通信 56

2020年
2月
通巻
202号

時期	ジャンル	形態	内容
201912	電磁波	出張講演	5G（第5世代移動体通信）の光と影—新たな電磁波曝露をどう
201912	住まい・地域・交通	ワークショップ	銭湯を熱く語り合う集い2019
201912	住まい・地域・交通	出張講演	食の安全について語り合い、そのあとワインを楽しむ会
201912	生命・生殖	上映会	【共催】上映イベント第10回「胃はなぜ溶けないのか 細胞
201912	防災	記事論文	水士砂災害の防災学習は「流域」で考えよう
201912	エネルギー	記事論文	えねこや講演会概要レポート
201912	環境・自然	記事論文	「オーストラリア便り」第1回「水の正義」について
201912	電磁波	記事論文	保育園児を対象とした午睡見守りWi-Fiシステムの電磁波測定
201912	食・健康・医療	記事論文	米粉：それは日本の食の改善の切り札になるだろうか？ 第11
201912	防災	記事論文	大川小訴訟判決確定-被災原因はどこまで明らかになったのか？
201912	放射線	外部講師招聘	個人線量計 それは何を明らかにできるのか？できないのか？
201912	教育・博物館	ワークショップ	植物園×大学×小石川植物園の公開例から～
201912	防災	ワークショップ	【共催】ご近所で、学んで備えて、安心！東日本大震災の教
201912	電磁波	出張講演	スマホリスクから子どもを守る 増大する電磁波曝露への対
201911	放射線	自前発表	腐薬物とは何者？ 放射線腐薬物も腐薬物の仲間だよな？
201911	情報・通信	外部講師招聘	ともに身体を動かすときの声
201911	その他	外部講師招聘	音達：流れに抗う街
201911	食・健康・医療	出張講演	若い世代にも知ってもらいたい 食・健康・環境危機
201910	食・健康・医療	ワークショップ	子ども料理科学教室「発酵という魔法 小さな生物（微生物
201910	放射線	外部講師招聘	中学校や高校の理科の実験と放射線安全～クルックス管の利
201910	教育・博物館	記事論文	「博物館と社会を考える」第10回 京都で開催された国際博
201910	教育・博物館	記事論文	「変わりゆく高等教育」第4回 日本の大学産業界の今後
201910	その他	記事論文	21世紀にふさわしい経済学を求めて 第8回
201910	エネルギー	記事論文	「姫路市役所冷房設定温度25℃」と「涼しくないエアコン調
201910	科学論・政策	記事論文	講義録「科学技術と社会との界面の存在＝技術者」の倫理と
201910	エネルギー	外部講師招聘	再エネで自給自足／独立電源の小屋（えねこや）



市民科学研究室が近々ホームページに掲げる
「市民研・活動一覧 ファイル(エクセル)」
イベントなどの活動と公表した記事論文をすべて
時系列、12のジャンル、9つの活動形態、で分類・整理して
ソーティングができるようにしている

市民研
NPO法人 市民科学研究室

Information

パンフレット『「5G」ここが問題!』発刊しました

2020年から日本においても、5G（第5世代移動体通信）の本格的な商用サービスが開始されます。

市民科学研究室はこれまで、高圧送電線、ノート型PC、図書館盗難防止ゲート、IHクッキングヒーターやオール電話住宅、携帯電話端末や携帯電話基地局、WiFi……など様々な機器・システムを対象にして、私たちが日常生活においていかなる電磁波をどの程度曝露しているのかを調べ、健康への影響をどう考え、対処すればよいかを論じてきました。

まさに今世界的に導入されつつある5Gは、電波利用の面で画期的なものとなりますが、それは同時に、電磁波曝露の面からみても、これまでとは一線を画するものになりそうです。

このたび、市民科学研究室は電磁波問題市民研究会と共同で、これまでの5Gに関する共同の調査の結果をふまえて、この5Gの電磁波問題をわかりやすく簡潔に解説したパンフレットを作製しました。

多くの方々にこの問題を知り、対処していく手がかりとして、役立てていただければ幸いです。

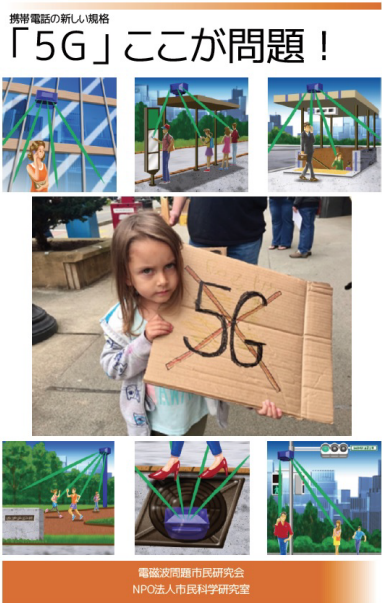
● A5判 12頁 フルカラー 頒価一部200円

● 10部以上をお求めの場合は、
送料はこちらで負担いたします。

● 50部以上をまとめてお求めの場合は、

一部の値段を100円にさせていただきます、
送料もこちらで負担いたします。

● 市民研ウェブサイトからオンラインでの購入、
もしくは「郵便振替用紙」を用いてのご注文
となります。



Event 市民科学講座 Aコース

3月13日(金) 監視社会の＜現在(いま)＞を考える — ビッグデータ、マイナンバー、AI…

マイナンバー制が導入された後、マイナンバー・カードの普及は一般的には進んでいないようだが、公務員等へはカードの所持・利用が半強制的に進められ、マイナンバーの利用範囲もさらなる拡大が図られようとしている。かつて懸念されていた国民総背番号制が実現されてしまったばかりでなく、近年の情報コンピュータ技術やAI（人工知能）などのビッグデータを扱うテクノロジーの進展により、現在、どのような監視社会になってしまっているのだろうか。長年、このテーマに取り組んでこられた斎藤貴男氏に講演していただきます。

●2020年3月13日(金) 18:30～20:30 (開場18:00)

●講師:斎藤貴男さん(ジャーナリスト)

●会場:光塾COMMON CONTACT並木町

●参加費:1000円(学生500円)／市民研会員は半額

かつ同伴者割引あり／事前予約が必要です(定員40名)

●時間:14:00～16:00(話題提供1時間+質疑応答1時間)

●申込受付:市民研ホームページの申し込みサイトにて

●講師プロフィール

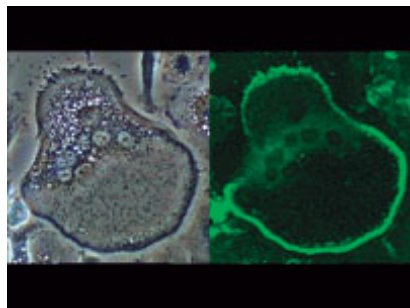
1958年生まれ。早稲田大学卒、バーミンガム大学でMA取得。日本工業新聞社やいくつかの雑誌などで記者を務めた後、ジャーナリストとして独立。社会の中に潜む、構造的な問題を浮き彫りにする多くの著書・記事を執筆。著書に『機会不平等』『民意のつくられかた』『安心のファシズム』『「マイナンバー」が日本を壊す』『消費税のカラクリ』『「東京電力」研究 排除の系譜』『子宮頸がんワクチン事件』など多数。



Event アイカム映画上映会 市民研協カイベント

2月29日(土) アイカム映画上映会第11回 (14:00-16:30)

骨は生きている 細胞のふるまいでとらえた造骨のメカニズム



2018年4月から開始しました、市民科学研究室と(株)アイカムが共同で実施する、映画作品上映企画の第11回目。次の3作品を上映します。

- ・1988 『生きている骨 骨粗鬆症の背景を探る』(21分)
- ・1990 『骨のリモデリング 吸収と形成のカップリング』(16分)
- ・2002 『The Life of Osteoclasts ～破骨細胞の一生～』(20分)

ゲスト・エキスパートにの青木和広先生(東京医科歯科大学教授・大学院医歯学総合研究口腔基礎工学分野)をお迎えし、参加者のみなさんと語り合います。

アイカム映画上映会第1回～第10回で取り上げたテーマ

- 第1回 ガンをみる、がんを語る
- 第2回 腸内フローラ その共生の姿を探る
- 第3回 発生・遺伝・染色体 アイカムの原点ここにあり
- 第4回 アレルギーと炎症 細胞映像で謎に迫る
- 第5回 歴史の中の医療、そして細胞空間からみた宇宙の中の生命
- 第6回 多彩な細胞の協奏として呼吸を理解する 肺炎の脅威にも目を向けて
- 第7回 ストーリーとしての”いのち” 生命への畏敬と科学的探求の関係を考える
- 第8回 病の原因究明 現場から学んだ先人たちの足跡を訪ねて
- 第9回 スーパーバグと常在菌 微生物の巧みからとらえる進化の姿
- 第10回 胃はなぜ溶けないのか 細胞映像から消化の仕組みを解く

▶すべて、アイカムのホームページで詳しいイベントレポートと参加者の皆さんからのご感想をお読みいただけます。

Event 市民科学講座 Dコース

3月14日(土) 年金、財政赤字、消費税 — 経済の疑問に答える

最近、話題になっている経済に関係する疑問に、お答えする企画を考えました。当然、これらの問題に経済学が答えることができないといけません。しかし、現在の経済学は多くの流派にわかれて、まったく異なる結論をくだしています。

そこで、各分野の学問や研究、実務を調べることで、経済学を立て直すことができるのではないかということで、研究してきた内容を市民科学研究室のサイトで「21世紀にふさわしい経済学を求めて」というタイトルで連載することになりました。ベースには、需要不足が不況招くことを明かにしたケインズ経済学があります。そこに上記のような各分野の知識を加えて整理したのが、連載の内容です。

今回のテーマは「年金、財政赤字、消費税」ですが、連載では簡単にふれただけであったり、年金のようにまだ書いていない内容もあります。そこで、今回それをくわしく説明すると同時に、具体的な質問をいただいて、それに答える形で理解を深める場として、学習会を企画しました。必ずしも連載を読んでいない方でも理解できるように説明します。多くのみなさまの参加をお待ちしています。

●2020年3月14日(土) 13:30-16:00

●講師:桑垣豊(市民研・特任研究員)

●場所:市民科学研究室事務所

●参加費:500円

★ウェブ会議システムを使っでの
遠隔参加も可能です。
その場合の参加費は
オンラインでの前払いになります。



市民研へのご入会／ご寄付のご案内

市民研の活動は会員となってくださる方々の会費やご寄付によって支えられています。

市民研の活動にご賛同いただける方、支援をしていただける方には、ご入会やご寄付をお願いいたします。

●送金・ご入会・ご寄付につきましては以下のやり方でお願いしています。

●100円単位の送金 100円単位のカンパや少額の送金(郵送料など)にご利用ください。

市民科学研究室の新しいホームページのメインメニューに「ご支援のお願い」があります。そこから「市民研オンラインショップ」のサイトに繋がります。そのなかに、「一口100円ご送金」のカートがありますので、ご利用ください。

●会員登録 年会費を送金して次のいずれかの会員になることができます。

★レイチェル会員………年会費 10,000円 (総会における議決権あり)

★ダーウィン会員………年会費 3,000円

会員になると、以下のサービスを受けることができます。

1. 隔月の機関誌『市民研通信』の送付(会員は全文アクセス可、非会員には有料の記事論文あり)
2. 市民研メーリングリストへの全会員の登録
3. 市民研の各種研究会への参加(skype参加を含む)
4. 市民研主催のイベントで参加費が半額になりかつ同伴者割引も
5. 市民研が刊行した出版物の寄贈(レイチェル会員のみ)
6. 会員間講師派遣制度の利用(この内容についてはホームページの該当ページを参照のこと)
7. 市民研主催の市民科学講座・各種イベント・研究会での配布資料、市民研の代表や理事メンバーらが講師として招かれた講演などの配布資料のうち、公開可能なものから精選して送付
8. 市民科学研究室所蔵の書籍・文献資料や映像資料の借り出し(期限1ヶ月)

●ご寄付 一口1,000円から受け付けております。

ご送金の方法は以下のいずれかをお願い致します。

郵便振替………口座加入者名:市民科学 振替口座番号:00160-4-608503

オンライン決済………市民研ホームページの「市民研オンラインショップ」から

NPO法人 市民科学研究室

〒113-0034 東京都文京区湯島2-14-9 角田ビル2F

Tel: 03-5834-8328 Email: renraku@shiminkagaku.org

はじめに

私が、中国の北京を拠点に研究を行うようになってからかなりの時間がたつ。その間、日本では、たとえば『前夜』という雑誌が高橋哲哉氏や徐京植氏らが主導して創刊されたりしていた。この雑誌を読みながら私は、この戦争前夜、ファシズム前夜という状況に「あれ」を登場させる必要があるのではないかと感じ続けていた。「あれ」とは、日本の高度経済成長とともに我々の前にあらわれ、人類の都市文明を破壊しつづけている怪獣ゴジラのことである。しかし、なぜ、ゴジラなのだろうか。この問いに一般的に答えることはなかなか難しい。ただ、なぜ「自分は、ゴジラに惹かれてしまうのか」という問いには、「ゴジラが日本の支配的な社会秩序に対する嫌悪であり続けているから。」とまずは、答えておきたい。

1. 現代中国で知られていないゴジラ

私が、ゴジラのことを考えるようになったのは、北京に拠点を移すよりずっと以前の1990年代半ば、『ゴジラ』(1954)をレンタルビデオ屋で借りて見たとき以降のことだった。『ウルトラマン』(1966)や『ウルトラセブン』(1967)『仮面ライダー』(1971)など日本の特撮作品で育ってきた私だが、『ゴジラ』(1954)は、私が想像していたのとはまるで違う映画であった。そこには、思いもよらない深い哲学が、存在しており、立ち止まって考えざるを得ないものがあるということを強く意識した。「ここには何か重要なものがある」という直観が私には、あった。……

【続きは市民研HPIにて】

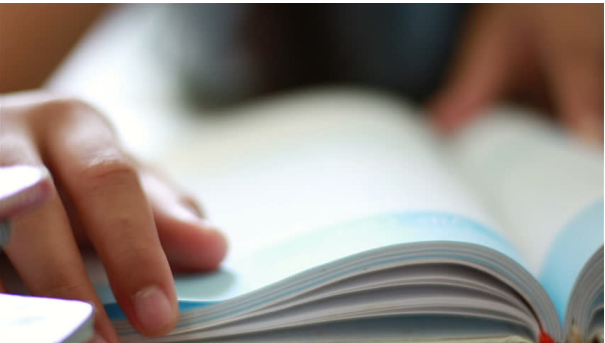


夜、品川に上陸するゴジラ

市民科学研究室は毎年年末になると、会員の皆さんから「私のおすすめ3作品」という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画やTV番組、聴いたCDや足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい3作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせていただきます。2019年までの原稿をまとめてPDFファイルでホームページに掲載しています。2019年の原稿を以下の方々より寄せていただきました。

杉野実さん、吉岡寛二さん、鈴木綾さん、上村光弘さん、瀬川嘉之さん、山口直樹さん、橋本正明さん、角田季美枝さん、丸山節子さん、白井基夫さん、東さちこさん、林浩二さん、上田昌文さん

数多くの興味深い書物や音楽や博物館の展示などがとりあげられています。市民科学研究室の該当ページを開いてお読みいただけると幸いです。



2019年11月9日と10日に行われた上記シンポジウムに、市民科学研究室の会員である白井基夫さん（医療生協さいたま生活協同組合・本部）と丸山節子さん（認定NPO法人「難病のこども支援全国ネットワーク」事務局）が参加されましたので、その報告記事を書いいただきました。



ノーマライゼーション、インクルーシブ教育、障害者差別解消法

ノーマライゼーションという語をはじめて聞いたのは、1981年だった。国際障害者年。これをきっかけに、障害者も、障害がない人と同じように社会に受け入れられ、同じような生活条件を提供される社会をめざそうという機運が、官民双方で高まっていた。それから約40年。また、教育現場の用語として、当時のインテグレーション（統合教育）から概念が拡大され、インクルーシブ教育がめざされるようになっていく。障害児も、障害のない子どもといっしょに同じクラスで同じ授業を受け、同じ体験をする、より共生の理念を徹底した概念である。そして、2013年に成立し、16年から施行された障害者差別解消法がある。その制定趣旨は、以下のとおり（内閣府のWebページから）。[全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障害を理由とする差別の解消を推進すること]……

【続きは市民研HPIにて】

上田：今日のテーマは、「胃」です。年末のこの折、胃に負担のかかるようなことを続けている方もきっといらっしゃると思うんですが、時季にふさわしいテーマかもしれません。胃というのは、非常に身近な毎日活躍してくれている臓器ですけれども、なんであんなに強烈な胃液を出すのに、胃自身は溶けてしまわないのだろうか。それから、実は、私のつれあいが数日前インフルエンザに罹り、治ったんですが、治る時に「非常に食事が辛い」と、なんで食べるのにこんなにエネルギーを使わなくてはいけないのか。食べるものによっても胃の働きなんかでずいぶんエネルギーの使い方が違うのかな、食べやすいものと食べにくいものって何なのかな、と疑問を口にしていました。考えてみたら不思議なことがいっぱいある「胃」なんです。今日はそれを映像で解き明かすということで、2本の映画を見たいと思っています。1本は短い14分、もう一本は43分の映画です。映画を通して、消化についての理解を深めていきたいと思います。私もアイカムの方と知り合って間もない頃、この『胃 巧妙な消化のしくみ』という映画を見たのですが、本当に驚きました。科学映像の真骨頂といえますか。ものを観察して探求することと、映像を撮ることがピタッと重なったすばらしい作品だと思います。

川村：アイカムの川村です。今もお話あったように、胃の中はpH1とか2とか塩酸くらいの強い酸性で、タンパクを分解する、それでいて胃自身もタンパクなのに分解しない。その謎は、簡単に言えば、胃酸で溶かされないよう粘液で護っているというのが答えなんです。そうなるともう一つ、謎が出てくる。胃袋の内側を粘液で覆ってしまったら、出てくる胃酸や消化酵素はどうやって、食物のところに届くのか。そのへんを丁寧に解き明かして行く映画です。あすか製薬さんのスポンサーでドクター向けに作られましたが、映像をみれば、一般の方でもわかりやすいと思います。撮影時のエピソードとしては、毎日毎日、闇夜のクラス、真っ黒い映像を見せられ続けたんです。酸に会うと黒くなるコンゴーレッドという赤い色素を使って、胃酸の出てくる場所を撮ろうというので、スタッフは毎日頑張っていたんですが、なかなかうまく見えない。すぐ真っ黒になってしまう。いつになったら撮れるんだろうな、と思っていました。それを電子顕微鏡も使っているいろいろ工夫して見せています。……

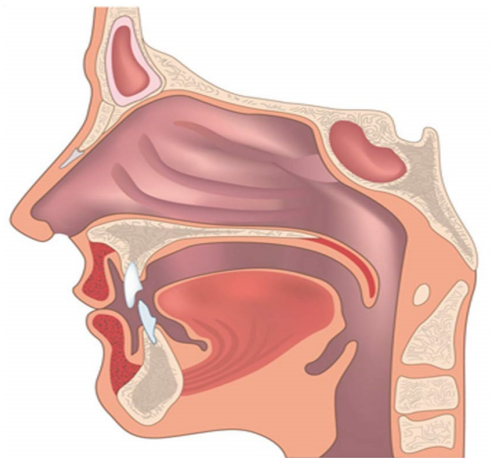


【続きは市民研HPIにて】

はじめに

この文章では、食道発声を初めとする「代用音声」について紹介を行います。そのまえに、なぜ筆者がこうした実践に関心を持ったのか記してみたいと思います。筆者は元々音楽学・音楽美学という学問分野を専門にしています。とくに音楽というのが歴史的にどのように捉えられてきたのかという問題を、その時代時代の実際の音楽実践と関連づけながら考察することをめざしています。あわせて共同主催というかたちで2012年から「駒場ヴォイス・スタディーズ研究会」という研究会を開催しています。この研究会では、ざっくりと「声」（話し声でも歌声でも）にまつわる諸々を学際的に研究することをめざしていますが、特に大事にしているのは「身体と関わるものとしての声」という視点です。これはたんに声が身体から発せられるということだけでなく、例えばラジオやレコードで声を聴くときなどに、身体そのものは目のまえに存在してしないにも関わらず、聴き手が声の発生源である身体を想像してしまう、ということも含んでいます。つまり、身体と声それ自体の関わりと同時に、身体と声を関わらせてしまう私たちの「欲望」のようなものも考察対象としているわけです。そのため、身体をめぐるジェンダーやアイデンティティの問題とも深く関わってくることになります。筆者自身のもとの関心にひきつけると、これは音楽というものが単なる音響現象としては捉えられず、より身体的な要素とも関わっているのではないかという問いに基づくものでした。……

【続きは市民研HPIにて】



キャンベラの住民は、記憶の限りでは昨年11月22日から既に2ヶ月以上森林火災の煙に苦しめられている。異常な高温と乾燥が続く中、消防隊員の尽力を以ってしても延焼し続ける地獄を間近にして、「火新世(1)」に突入したことを実感させられる。

森林火災と被害の日常化

森林火災の煙が街を覆うと、バーベキュー現場に出くわしたような焼いた臭いがし始める。この臭いをずっと嗅いでいると、煙の中にあっても臭いを感じなくなってくる。私が航空機でキャンベラに戻ったとき、キャンベラ空港着陸10分ほど前から、機内で煙が臭い出した。しかし、空港を出る頃には特に感じなくなっていた。街灯は、煙によるティンダル現象で明かりの道筋がよく見えていた。森林火災による煙が濃いと、日光が黄色くなったり、オレンジになったりする。空一面が黄色くなることもあれば、地面に映った日差しがオレンジ色のこともある。外が黄色いのが当たり前になると、色覚が調整されて、黄色がだんだん白っぽく見えてくることはあるのだろうか。分からないが、そう疑問に思ったりもする。

今のキャンベラにいと煙の臭い、空の色、空気の質などに対する反応が鈍くなっていくように条件づけられているように覚える。このような脱感作と似て、災害が日常化することによる感覚の鈍化への懸念がある。キャンベラに住む人たちには、この災害という非日常に慣れきっている者がいるかもしれない。「これまでの生活と比べて不便にはなったけど、何だかんだ生きていくことができる」という感覚は、たくましいともいえるが、悪化する現状を肯定することになり、その蔓延は気候正義の実現を目指した大衆による共同行動から遠ざけるものとなりうると懸念する。……

【続きは市民研HPIにて】



キャンベラに襲い掛かろうとする森林火災の煙。2020年1月28日 16:36 AEDT 撮影